

ユトレイター！

あるアメリカ人ユダヤ人家庭で起きた、メシア探求の物語

スタン・テルチン著

前田健二訳

神の栄光のために
エセル、ジユデイ、アンへ
真理を求め、信じる人たちへ
飢えた心を持つ、求道者たちへ
好奇心を持つ、すべての人たちへ

序文

どこであつたか、大学時代に聞いた格言で、心に残ったものはこれだ。

「人生における答とは、「一ダース十セント」で売られている、つまらないものと同じだ。皆それぞれ、その程度の答は持っている。しかし、真の問題は、正しい問いを発することによって初めて明確になる」

正しい問いに対する答を求めることは、あなたの人生を変えることにもなる。これから読者の皆さんとともに、自身の発した問いと、それに対する答をわかちあいたいと思つ。それは劇的に、私の人生を変えたのである。

3

4

目次

序文	
1 ジュディからの電話	6
2 ジュディに何が起きたのか？	16
3 家族の伝統	34
4 調査の開始	52
5 ハイディ	70
6 私の信じるもの	80
7 調査は続く	96
8 契約の民	112
9 緊張は膨らむ	130
10 初期のユダヤ人信者達	140
11 危機到来	158

- 1 2 決断
- 1 3 家族の再結成
- 1 4 最後の質問
- 1 5 今後の人生
- 1 6 後口談

聖書の預言についての解説

215 207 193 184 176 171

5

6

1 ジュディからの電話

その電話、私たち家族全員の人生を完全に一変させることになる電話は、ある日曜日の夜、十時三十分にかかってきた。

その電話は、私たちの長女、ボストン大学一年生、二十一歳のジュディからであった。電話がかかってきた時、妻のエセルはシャワーを浴びていた。そして、私たちのもう一人の娘、ウォルト・ウィットマン高校四年生のアンは、自宅で宿題をしていた。

「こんにちは、パパ、ジュディよ。今、お話できる？」

「もちろんさ、話せるよ。元気でやっているかい？」

「私は元気よ。でも、これからお話することはとても重要なことなの」

そう言っジュディの声には一種の翳りがあった。私の心の中の警鐘が鳴った。何か悪いことが起きたのだ。

「ジュディ、何だね？何か起きたのかい？」

「違うのよ、警戒しないで。特に問題はないのよ。ただ、今日一日中ずっとパパにお話した

いと思っていたことなの。ママは今、もう一台の電話で会話に参加できる。」

「ママは今シャワーを浴びているんだ」

「じゃあ、いいわ。ママには後でお話するから」

「聞いているよ、話してごらん、ジュディ」

「パパ、私、パパとママにとても長いお手紙を書いたの。書き上げるのに何日もかかったわ。今朝ようやく書き終えて、ずっと読み返していたところなの。でも、なぜかそれを郵送できなかった。それをパパが読んで傷つくのが怖かったから。今までの人生で一番するのが難しかった。パパ、その手紙をこれから読んでもいい？」

私は、頭に浮かぶあらゆる悪い考えを排除しようとした。妊娠した、どこかの男と駆け落ちした、警察の厄介になった……。彼女のよつな素晴らしい娘、大人で、感情優しい娘が！ 落ち着け、そんなことが彼女の身の上になりかかるとはさすがではないか。

「ジュディ、読み始めるのをちょっと待っていてくれるかい？ メモを取りたいのでノートと鉛筆を持ってくるから」

エセルはまだシャワーを浴びており、私はノートと鉛筆を持って電話口に戻った。

「ジュディ、いいよ、話してごらん」

ジュディは話すのをためらっていたが、まず、彼女がこれから話そうとすることについて改めて申し訳ないと話した。それから彼女は早口で話し始めた。彼女の話を聞きながら、私の咽喉が次第に強張ってゆくのが感じた。

この私の緊張は、私達家族同士の、極めて緊密な関係、良い事も悪い事もすべて共有する類の、から生じていることを私は理解していた。エセルと私は、いつも私達の二人の素晴らしい娘を誇りにしていた。アンは優秀な学生で、特に芸術の分野で秀でた才能を示した。ジュディはボストン大学で特別教育学を専攻しており、障害のある子供達を養護するための教育を受けていた。ジュディの大学生活は、私達の地元、自宅から車で三十分のところにあるメリーランド大学から始まった。最初の一年半、ジュディは大学の騒々しい寮で過ごしたが、途中で耐えられなくなり、翌年一月から今のボストン大学へ転入した。自分でアパートを借り、ボストンでの生活はともいって話していた。

この時点、つまり一九七五年の初春の時点、私は人生の頂点にいるようだった。五十歳にして生命保険ビジネスを成功させ、素晴らしい妻、二人の愛らしい娘、立派な家を持った。私の中の

すべてが、これからジユディから聞かされる恐ろしいニュースに対して警戒感を持ち始めた。「親愛なるパパとママへ」彼女は話し始めた。「この手紙を書くことは大変辛いことでした。なぜなら、私はパパとママ、そして妹のアンをとて愛しているから。私達のようにとても緊密な家族を私は他に知りません」

私は、ジユディがいかに私達家族を愛しているか、私達両親が他の親達のように子供達には立派な振舞をするように説きながら自分たちは勝手に振舞ったりすることがなかったとか、自分達がお互いに正直であり通したとか、彼女がいかに愛と平和に満ちた家庭に生まれ育ち、我々両親が愛情込めて彼女を育てたか、などといったことについて話すことを、無感覚なままで聞いていた。

そして、彼女が最近陥った孤独感について語り始めた時、私の受話器を握る手が硬くなった。しかし、彼女はその孤独感を、緊急電話ホットラインのアルバイト、電話で緊急の助けを求める人に応答する仕事を始めたことにより克服したことを説明した。そして、危うく自殺を図るところであった男性と彼に対して不十分な応答できなかった自分についての長い話が続いた。しかし、その職場ではより長い経験と違った視点を持つベテラン職員達がいて、たぐさんの対応

法を用意していたとも語った。

そして、彼女は、今度はディックについての話を始めた。ディックは、彼女によると「聖書信者」であるとのことだ。彼も緊急電話ホットラインの仕事で一緒だったそうだ。ディックとジユディは友達になり、ディックは少しずつジユディに聖書についての話をするようになった。ジユディが聖書を読んだことがなく、実は持ってもいないことを話したところ、ディックは彼女に聖書をプレゼントし、それからの数ヶ月、ディックは彼女にどこを読むべきかを教え、彼女はそれをその通りに読むできた。

「私は、ディックととても長い時間話をしたの。パパ、そして、その話と、彼からもらった聖書と、他の様々なことから学んだことは……あの……」

私は、彼女が次の言葉を継ぐ前に一瞬息を止めた。

「そして、私自身も、信じるようになったの」

そこで、長い沈黙の時間が流れた。

「それは、一体どついつの意味だろっジユディっ」

「つまり、私は神を信じるというのよ。そして、聖書は神の言葉だということよ。そして（長い

沈黙。イエスをメシアとして信じているというジョー。私は言葉を失った。

世の多くの親達は、ジユディイのこのような告白を歓迎するかもしれない。しかし、私にとっては、彼女の告白は実に破壊をもたらしたのだ！

おわかりいただけるであろう、我々はユダヤ人なのだ！

我々ユダヤ人にとって、イエスの名を口にすることは十分に異質なことである。彼をメシアとしてとらえることは、我々にとってまったくありえないことだ。我々にとってイエスをメシアと信じることは、すなわち我々ユダヤ民族を裏切ることであり、過去二千年間において行われてきた、我々に対する数々の迫害に加担することになるのだ。

なぜ、ジユディイはこんなことをしでかしたのか？

私の中に、とてつもない怒りが湧き起こってきた。私とった最初の反応は、彼女を電話越しに怒鳴りつけることだった。彼女を叱る言葉が続いて出る中、一方で、私の心の中で次のような別の声が浮かび上がってきた。『彼女が何を言っているのか？』

しかし、私も彼女を懲らさなければならない。この会話を決して怒りや後悔を許さず、彼女が狂気の沙汰から救われるように、私も彼女に正確な精神状態を回復させるのだ。

そして、私はその通りを行った。私は、心の中では死んでいたが、彼女に判決を与えることなく、逆に彼女に質問を投げかけることにより、会話をオープンにしようと努めた。「いいかね、ジユディイ」最後に私はよく言った。「いずれにせよ、こういった深刻な問題を今夜のうちに解決することは不可能だ。あと数週間で君は春休みで家に帰ってくるのだから、その時にこの問題についてじっくり話し合おう。その時、君も君の言い分をよく説明してくれ。だから、今のところはとりあえずこの問題をそのままにしておいて、しばし冷却させよう。いいかね？」

ジユディイのため息が漏れた。そして、長い沈黙。そして、彼女は大きく息を入れた。

「わかったわ、パパ。愛しているわ。おやすみなさい」

私は受話器を置いた。完全に意気消耗していた。

エセルは、私が受話器を置くずっと前にシャワーを浴び終えていた。彼女は、私がジユディイと話し合いを始めて十分ほど経過した頃に私の書斎に入ってきた。そして、彼女は我々の会話を、主に私の側からの言い分を、しっかりと聞いていた。私が受話器を置いた時、彼女は言さずお

り、怒りに満ちていた。

私が、ジュディの側の言い分を彼女に説明しようとした時、彼女は突然飛び起き、キッチンへと駆け出していった。怒りにまかせた彼女が、鍋を打ち叩き、何事かを喚き続けているのが聞こえてきた。何にせよ、彼女を落ち着かせなければならぬ。

私がキッチンへ入ると、彼女の打ちひしがれた眼が私に向けられた。「一体、どこで間違ってしまったの？ 私達がジュディを愛した以上に自分達の子供を愛せる親がいるの？ どうして彼女は私達にこんなことが出来るの？」

そしてエセルは泣き出してしまった。妻の泣く姿を見るのは耐え難いことだ。私達の二十七年間の結婚生活において、妻が泣くのは、極めて異例の場合のみであった。妻に泣かれると、私自身も辛い気持ちになった。妻の慰められない涙を見て、あらためて自分の心の中に激しい怒りが生じてきた。

いくつもの点で、ジュディの行動は私よりも妻のエセルを大きく傷つけた。私とジュディとは緊密な関係にあったが、妻とジュディはさらに緊密な関係にあった。人と人がお互いに本当に愛し、愛されていると、その関係の深さを理解出来るようになる。エセルは、本当に自分のすべて

を、二人の娘ジュディとアンにささげていた。そして、今回のこの事件が、彼女に対するジュディの報いなのだ。一体、両親に背を向ける子供を、どのように扱ったらよいのであるのか？ しかも、自分達だけではなく、自分達の民族全員に背を向ける子供を？

結局、その夜、我々家族は朝までまんじりともできなかった。

朝、私は職場に出勤すると、知り合いのラビに電話をし、昨晚起こった事件について打ち明けた。ラビの対応は、私の緊張をやわらげ、希望を与えた。

「まあまあ、スタン、そんなにあわてないで。それほど深刻な話ではありませんよ。ジュディは今、ひとつの情緒的な体験をしているに過ぎないのですよ。あと数週間で彼女は家に帰って来るのですから、その時に顔を合わせてしっかりと話し合ったら良いのですよ。彼女は、ユダヤ人のかわいい女の子ですよ。あなたは彼女を愛し、彼女もあなたを愛している。いずれ彼女は正常な精神に戻りますよ。道理をもって説明すればいいのです。この程度の問題で良かったではありませんか。別にドラッグ中毒になったというわけでもないのですから。いずれ解決します。彼女は大丈夫ですよ。」

ラビの請け合いを得て、私の心は幾分か落ち着いていた。そしてエセルに電話をかけ、ラビのアド

バイスを彼女にも伝えた。ラビは間違いないこのような問題を以前にも経験しており、私達よりも上手な対応のしかたを知っているはずであった。それに、もしかするとジユデイが家に帰ってくる頃には、彼女は正常に戻っているかも知れない！一体何を悩む必要があるうー！問題を解決するには、時間はたつぷりあるではないか！

ジユデイが家に帰って来るまでの二週間、私は自分の仕事に没頭した。そして、いよいよジユデイを空港に迎えに行く日がやってきたのである。